

## 【父性の育て方】

由布市 佐野 真樹さん

陣痛開始から4時間が経った。妻が分娩室に入り、「準備ができるまで」と廊下で待たされていたが、いよいよ「お父さんも中へどうぞ」と助産師から声がかかった。分娩台ののって息を荒げる妻に「頑張れ」と励ます助産師や医師たち。初めて見る光景に面食らいながらも、つられて自分も妻に「がんばれ」と声をかける。普段あまり使わない言葉で、少し気恥ずかしく感じていると、妻まで「ガンバレ〜」と小さく呻いていた。周囲の励ましに合わせて自分を鼓舞しようとしているのかと思っていた。そのうち、「ガンバレ〜」の中に「ガンバって〜」と呼びかける声を聞いた時、そうか、妻はお腹の子どもにエールを送っていたのかと気付かされた。新しい命が生まれてくると、頭では理解していたつもりだが、妻のその姿で初めて、オレは親になるんだな、と実感させられた。よし、頑張って父親業をこなしていくぞと決意を新たにした。

ちっさなおさるさんを連れて家に帰る。泣く時は、お腹が減ったかオムツが汚れた時か。妻が迅速に対応する。沐浴を手伝うぐらいで、なかなか父親の出番はないなと感じ、随分気が早く買ってしまったスリングに飼い犬を載せて抱いてみる。

はいはいができるようになり、少しずつ自我が芽生えてきたのか、何にムズがっているのか分からない時も暫々あるようになってくる。そんな時も、妻がおっぱいで黙らせる。娘もそれで黙る。夜泣きもおっぱいで黙らせる。自分にはない。ないことはないが、一度お風呂に入れている時に、娘が間違っって吸い付こうとしたが、胸毛が絡んで大泣きして以来見向きもされなくなった。乳離れしてからかな、父親の出番は、と肩を落としていると、「ほら、おとうさん拗ねてるよ」と妻が娘に話しかけていた。

妻はことあるごとに、娘に「ほらおとうさんだよ」と声を掛ける。パパっていう柄でもないから、と自分でリクエストしたものの「おとうさん」という発音は子どもには難しいのか、娘は全然言葉にする気配がなかった。それでも、妻は「あ、おとうさんだ」と娘に話しかけ続けていた。

ひとり歩きができるようになった。歩きまわる姿を見るのを楽しみに帰ってきて、ドアを開けると、

「おとーなん！」

とって、娘がこっちに向かって歩いてくる。当たり前のことかもしれないが、娘が娘で自分が父親なんだと心の底から納得し、嬉しいやら、ちょっと面映いやらで言葉が出なかった瞬間であった。

1歳ぐらいまでの間は、やはり子育ての中心は母親であり、母親の十分なアタッチメントが必要な期間であるのだろう。その中で、いかに父親として関わるかというのは難しい問題であった。自分の場合は、妻が常に父親としての自分を意識できるように働きかけていてくれたのだと思う。今感じている父性は妻に育まれた父性なのかもしれない。